

## 早岐瀬戸にアメリカカブトガニ成体 国内初確認、在来種淘汰の危険性も



アメリカカブトガニ(左)は日本在来種(右)よりも小さく甲羅の前部が平らなのが特徴=西海パールシーセンター水族館

佐世保市の早岐瀬戸で、国内には生息していないアメリカカブトガニの雄の成体が見つかった。絶滅が危惧(きぐ)されている在来種の保護に取り組む「日本カブトガニを守る会」によると、国内の自然環境下で生息が確認されたのは初めて。

カブトガニ研究者がいる佐世保市の西海パールシーセンター水族館は「アメリカカブトガニは在来種と同じ種類の貝を食べ多くの卵を産むのが特徴。雌がいれば大量に繁殖し、在来種が淘汰(とうた)される危険性がある」としている。

アメリカカブトガニは北米大陸の東海岸に生息。日本在来種より小さく、甲羅の形も前が平べったいなど異なる。国内では主に幼生(二〇センチ未満)をペットショップで購入できるが、適当な飼育環境がなければ成体まで育てるのは難しいという。

早岐瀬戸では十月八日、市内の漁業者の網に掛かった。全長約三六・六センチ、甲幅一七・四センチ。普段は在来種を海に戻している漁業者が「いつものと形や大きさが違う」として水族館に持ち込んだ。

水族館で在来種の調査を続けている岩岡千香子さん(31)は「ペットにしていたのが捨てられ成長した可能性が高い」と推測。「本来の自然環境にいない生き物を簡単に放さないで」と訴える。

ほかにも生息、繁殖していれば生態系への影響が大きいため、同館は「見慣れないカブトガニを見つけたら情報提供を」と呼び掛け。調査も検討している。

アメリカカブトガニは来年七月の水族館拡充オープン後、生態系を壊す可能性のある外来種の一例として展示する予定。